



▲内藤 彰

◎東京ニュー・シティ管弦楽団第九回 定期演奏会

当夜も常任、内藤彰の指揮で没後百年記念のブラームス・プログラム。前半はロシアからアレクサンドル・M・マルクスを迎えピアノ協奏曲第一番。実演で聴くとティンパニの強奏だけが目立ち、意外に鳴りの悪いこの曲の出だしたが、第1主題はクッキリ浮かび上がり内藤の指揮も明解。第2楽章の清澄な抒情は自発的な音楽する悦びに溢れ特に木管が優れていた。マルクス

のピアノはずいぶん自在な弾き方で所々、卓越したテクニックの片鱗を見せたものの、やや求心力には欠け全体としてのまとまりが弱く各部分が散漫な感じ。

後半は交響曲第一番。贅肉のないスリムな二管編成で男所帯じみた暗さのない爽やかなブラームスだが、厚みにも欠けてはおらず出だしの飛び出し気味の低弦の気魄など充分に雄渾で純音楽的な名演。第2楽章もホルンや木管の健闘、コンマスのソロの細やかな絹練りの美音など実に艶やかでオペラやバレエ公演で鍛えた技量は既に相当なものがありそう。低弦の幽玄な下階に

始まる終楽章のドラマも指揮者共々、見事に表現し切っていた。(3月23日、北とぴあさくらホール) (浅岡弘和)